

命の恩人／小野参謀長との関わり

崔 慶祿 歩兵第 78 聯隊勤務、
59 期相当、元韓国駐日大使

小野参謀長は、私にとって父のような人でした。又命の恩人でした。若し参謀長との出会いが、なかったら今日の私はなかったでしょう。当時私は歩兵第 78 聯隊に入隊していました。昭和 17 年の秋、竜山の汝成島で演習中、丁度馬に乗って演習視察に来られた参謀長に、松田中隊長の口添えでお会いしました。私が韓国出身であること、又士官学校に推薦していること等を中隊長が話されました。その後、師団司令部に呼ばれて参謀長と親しくお会いしました。参謀長は最初に「内地人が、朝鮮民族に随分すまんことをしている。困ったものだ。」と私に話されたことが、大変印象的でした。そして「日朝は、一視同仁で、手を携えて立派な国造りをしなければならない。お互い喧嘩などしている時ではない。」と云われました。私は「一視同仁といってもお互い歴史習慣から夫々特異な事情もあるので、なかなか一視同仁にはならないでしょう。しかしお互い努力すべきだと思います。」と答えたら参謀長は、「若いに似合わず立派な見識を持っている。」と笑い乍ら褒めて下さいました。そして家庭の事情など聞かれ、又陸士への受験を大変喜んでくれ最後に「君は将来朝鮮民族の指導者となるべき人だ。その資質が充分ある。これからは何事も自分を親と違って遠慮なく相談に来なさい。」と云われました。最初は、参謀長の本心を信じきれなかったのですが、何度かお会いするに従って、その誠が良く判るようになりました。当時一部には朝鮮独立運動をやっていた人々も居ましたが、参謀長は、そのような小義に走らず、日朝の大義に生きることを教えて下さいました。

或る日、私は、参謀長に呼ばれました。参謀長は、わざわざ写真班に、私と二人の写真を撮らせ、その写真に御自身のサインをされ、「この写真を、机の前に飾って、しっかり勉強すること、俺は何時も君の勉強

振りを見て居るから。」と云われました。私はその写真を大事に、机の前に飾り、毎日眺め乍ら、猛訓練の疲れにも負けず、勉強をしたお陰で、無事陸士に合格することが出来ました。あの思い出多い写真は、朝鮮動乱の時、凡ての私財と共に、灰燼となってしまいました。残念で仕方ありません。

ニューギニアのウエワクでは、私達の聯隊は、師団司令部の近くに居ました。そして私は、時々司令部に通訳の仕事の手伝いに出頭しました折に、参謀長とよくお会いすることがありました。その時、パイナップルの缶詰やら氷砂糖を戴いたことが忘れられません。そして「お前はこの戦争で絶対死んではいかん。必ず生きて帰って日朝の大義に生きよ。体を大切にせよ。」とその都度訓されました。その年の 9 月、師団は、いよいよフィンシハーヘンの大作戦に突入しました。昭和 18 年 11 月 19 日夜、私は 19 名の部下を率い、ソング河左岸ボンガ・古川山南方の敵砲兵陣地を爆破するために三度目の斬り込みを行いました。師団は、当時フィンシの攻防戦に死闘を繰り返していたのです。又実の父と恩っていた小野参謀長が、この戦の作戦を行っていたのですから私達も必死の闘いの連続でした。斬り込みは、かなりの成果を挙げましたが、敵の防禦線の機関銃陣地が方々に用意されてあった為全員が戦死、僅かに私と山田与一上等兵（長崎県出身）だけが重傷で生き残りました。私は体に 8 発の弾を受け、又山田上等兵も腹部に何発か被弾しました。彼は腹を千人針の布でしばって、私を担ぎ、或いは引っぱって、3 日かかって 22 日の夕方、友軍の第一線に辿りつきました。

丁度その時、神の導きでしょうか、小野参謀長が、第一線の視察に来ておられ、私を発見されたのです。「絶対に死んだらいかん。しっかりせよ。」と大変激励されました。丁度その時は、雨が降っていました。参謀長は、御自分の雨ガッパを脱いで、私に掛けて下さり、恩賜の煙草を口添えに私の口にくわえさせて下さいました。そして「この男を殺したら大君に申し訳けが立たない。絶対に助けねばならない。」と云われ、直ぐ軍医大尉を呼ばれ、後送の指示と自ら添書を書かれ、軍医に渡されました。そして連絡の曹長を残して、次の作戦指導に行かれ

ました。恐らくその間 15 分位の時間だったでしょう。私と山田上等兵は、直ちに衛生隊まで運ばれ、応急手当を受けましたが、山田上等兵は、腹部が既に腐敗して居り遂に亡くなりました。私は夜明前に友軍の舟艇に乗せられ、軍医が付いてくださり、後送され、文字通り九死に一生を得ました。舟艇は、昼間は岸のジャングルの中に隠れ、夕方に出発しました。マダン經由ウエワク迄戻りました。通常ですとせいぜいシオカマダンの前線病院に入れられるのですが、添書にどう書かれてあったのかは知りませんが、一気にウエワク迄参り、ウエワク上陸後 2 時間後に、重爆に乗せられマニラに還られ、マニラの陸軍病院に入れられました。ウエワク迄の途中の各友軍の基地では、大変な待遇を受けました。私は重傷で寝たままの態ですが、参謀長の大佐の肩章のついた雨具を覆っていますし、又軍医大尉が付きそっているのですから、万事順調の移動が出来ました。

私は昭和 19 年 5 月までマニラの陸軍病院で至れり尽せりの治療を受け、その後小倉・別府の陸軍病院經由東京の第一陸軍病院で更に充分な治療を受け、19 年 9 月に竜山の軍司令部付として帰還しました。以上の通りですが、小野参謀長は、文字通り私にとって命の恩人でした。又父でもありました。若しあの時、参謀長にお会いすることがなければ、又山田上等兵が私を友軍第一線迄連れて行ってくれなければ、今日の私は無かったでしょう。

戦後いろいろな事が起きました。私は韓国陸軍の設立に務め、又閣僚、外交官とし

て世界各地を廻りいろいろな方とお会いしていますが、小野参謀長は稀に見る立派なお方でした。ほんとうに偉い人でした。見識も高く度量も大きくそれに神の心を待った人だったと恩みます。あの戦も、若し小野参謀長が中央で作戦指導をやって居られたら、もっと別な好ましい形になっていたものと思います。又今御健在で居られたら、日韓の為にも、世界の為にも有為なことをして戴けたものと悔やまれてなりません。私も今日、あの時参謀長の云われた日韓の大義のために努めて居ります。

しみじみ考えて見ますと、私は参謀長の実子の皆さま達以上に、参謀長から父の愛を受けたのです。私は、公職を終えたら山口の小野閣下の墓参と長崎の山田上等兵の墓参を終生の念願としております。合掌
編集子注：本稿は、小野武雄参謀長（32 期）の追悼録「白雲悠々」〈昭和 28 年 4 月刊行〉に崔慶祿氏自身が投稿した記事を転載したものです。本記事中にもあるようこ崔氏は歩兵第 78 聯隊に入隊後、昭和 17 年陸士を受験合格したが、入校することなく南方の第一線に配属され戦闘に参加しました。59 期生相当です